**№58　テーマ『感性論哲学の職業観』**

**講話日2014年5月9日**

**ただいまご紹介いただきました吉村思風でございます。よろしくお願いします。今年も新年度を迎えて多くの若者が社会へ巣立つという時期になりました。アサヒグローバルさんでもやっぱり新入社員の方がたくさん入ってきておりますので、今日はそういう社会に巣立って、これからプロとして仕事をしていく時期においてどのような心構えで社会で仕事をしたら良いのかという…そういうところから職業観ということについてお話をさせていただきたいと思っております。これは新入社員の方だけではなく、何年何十年もこの会社で働いている方々も、やっぱり新年度を迎えて初心にかえってもう一度「社会とは何なのか、職業とは何なのか」を振り返って心新たにして仕事に取り組んでもらいたいという思いもあって、今日は感性論哲学の職業観ということでお話をさせていただきたいと思っております。**

**まずは第一番目「社会においては社会性が求められる」ということなんですけど、あまり最近は社会性が大事だとは言葉として言われなくなったんですけど、だけど社会というものの中で人間が生きる上で一番基本的に心しなければならないものが社会性と言われるものであります。社会性というのは、基本的に性格の違う人とも一緒にやっていける、考え方が違っても一緒にやっていける、価値観が違っても一緒に仕事ができる、宗教が違っても民族が違っても一緒に生きていくことができる…そういう状態を社会性があると言うんですよね。性格が違うと一緒にやっていけないという人は社会性はないという風に言われますし、また考え方が違ったら一緒にやっていけない、これも社会性がないと言われるわけですね。**

**ところが今日の社会における現状というのは、社会というものをあまり意識しておらず、「考え方が違ったら一緒にやっていけないよな」「そうだよな」となりがちで、あるいは「価値観が違ったら一緒に仕事ができるはずはないよね」「そうだよね」と言って、あまり社会性を問題にしないで価値観を統合するとか、同じ考え方の人間ばっかり集まって仕事をするとか、そういうことがいかにも普通のことのように考えられてしまってるわけですね。**

**それが家庭においては、夫婦において考え方が違ったら一緒にやっていけないということになってしまって、離婚の激増というものが止まらない、そういうことに繋がってきているわけなんですね。そういう意味においては、人間というのは基本的に社会的存在と言われていて、社会を離れて人間は生きることはできないという風に考えられておりますので、そういう意味においては人間が社会的存在として社会の中で生きて仕事をするという上で一番根本に求められる課題が、“社会性を持って生きる”ということなのではないかと思うんですね。だけども、現実は考え方が違ったら一緒にやっていけない、価値観が違ったら一緒に仕事ができない…と、そういうことになってしまっている。これは明らかに社会性がないという風に言われるようなそういう状態の生き方ではないかと思われます。**

**では、なぜ考え方が違ったら一緒にやっていけない、感じ方が違ったら一緒に生活できない、価値観が違ったら一緒に仕事ができないという状態になってしまったのか、ということなんですけど。これは原理的には人間が理性化されてしまって、近代は人間の本質は理性だと考えられていましたから、理性が成長すれば人間も成長する、理性的に全てのことを処理すればすべてうまくいくというような、考え方が近代ずっと続いてきたわけですね。その結果として、人間が理性化されてしまった。それで理性化されてしまうとどういうことなのかと言うと、理性というのは、真理は一つと考える能力ですので理性的になると考え方の違いは対立を呼び、考え方の違いがお互い敵対的な意識になってしまうということになるわけですね。また理性というのは画一性を追求するというか、皆と同じような考え方や価値観を持つという、そういう状態にしていくというのが、理性という能力の働きであります。真理はひとつと考えて画一性を追求して、そして理性というのはみんなに共通するものをつくり出すという風な、そういう働きをしますので、どうしても理性的になると考え方がひとつでないとやっていけない、あるいは価値観が一緒じゃないとやってけないと。そういう意識を持った人間になってしまうんですね。これが明らかに人間が人間性というものをなくしてしまって、理性の奴隷となって人間性が理性化されてしまった状態という風に考えることができます。**

**だけどもこれから我々が生きなければならない社会というのは、理性的な社会ではなく、個性の時代と呼ばれて皆が考え方や価値観、感じ方や宗教が違っても一緒にやっていける個性というものを大事にする時代が求められていくことになります。ですので、これから社会に出て、仕事において成果をあげる力をつくっていこうと思ったならば、どうしても社会性と言える考え方や価値観や感じ方が違っても一緒に生きていくことができる、そういう力というものを我々は養っていかなければ仕事において成功することはできないだろうし、また会社の中でいろんな個性を持った人と共に力を合わせて協力し合いながら、助け合いながら生きるということはできないのではないか、と考えることができます。**

**社会に出て仕事をする上で一番基本的に求められる課題は、社会性を持って生きるということなんですね。これは現実の企業における仕事の仕方というのは、まだまだ価値観や考え方の統一など、そういう同じ考え方や価値観を持つということが大事だと言われるような、そういう状況で今は仕事が進んでますけど。だけども、自分とは違った考え方や価値観を持ったいろいろなお客さんとも対応しなければならないことが多々あると思うんですけど、考え方が違っても嫌な感じにならないで違った考え方の人とも人間性を持って仲良く付き合っていく生き方にしていかなければなりません。**

**そのためにはどういう風な意識が大事なのか。同じ考え方の人ばっかり集まっても成長はしない。同じ考え方、価値観の人と一緒に仕事をすれば、楽しいかもしれないし、気楽で問題が起こらない。気楽に仕事ができるとなるかもしれませんけど、残念ながら同じ考え方の人間がどんだけ集まっても成長はない。成長しようと思ったら自分にないものを持っている人と付き合って、自分にないものを相手から学ぶという形で人間は成長というものを実現することができるわけですね。そのためには成長しようと思ったならば、自分とは違った考え方や感じ方や価値観を持った人と関わって、自分にないものを相手から学んで自分が成長していくという風な生き方を、仕事の上でも生活の上でも求めていかなければならないという風に言うことができるわけですね。**

**どうすれば考え方の違う人と一緒に生きていくことができるのかをちゃんと考えなければなりません。では、考え方の違いとは一体どういう風にしてできてくるものなのかをちょっと考えてみますと、生まれながらにして考え方が違うということはないんですよね。考え方の違いは後天的につくられるものだという風に言うことができます。では、考え方の違いが具体的にできてくる原因はなんなのか。原因は五つあります。体験が違うと考え方が違ってくる。また経験が違うと考え方が違ってくる。また持っている知識や情報が違うと考え方が違ってくる。それから物事の解釈の仕方が違うと考え方が違ってくる。それから最後の五つ目はさまざまな人生の出会いの違いというものも考え方の違いをつくり出す原因であります。この五つが考え方や価値観の違いをつくり出す原因になるわけですね。**

**体験と経験は英語で言えば、両方ともエクスペリエンスで一緒なんですけど、日本語で言う場合は体験と経験は次元が違います。体験というのは自分の肉体が外の世界と関わった事実のこと。経験というのはその体験から自分が何を学びとったか。ですから同じことを体験しても、その人の能力や人間性によってその体験から何を学ぶとるかっていう内容が違ってくるわけですね。体験と経験は別のものとして考えなければなりません。とにかくは体験・経験が違えば考え方が違ってくる。知識情報が違えば考え方が違ってくる。物事の解釈の仕方が違うと考え方が違ってくる。そして人生のさまざまな出会いが違うと考え方が違ってくる。どういう災害と出会ったか、どういう事件と出会ったか、どういう事故と出会ったか、どういう人物と出会ったか、どういう本と出会ったかなど、さまざまな出会いによって人間の考え方や価値観は随分と違ってくるものであります。ということは考え方が違うことで対立をしているとはどういうことなのかと言ったら、それは相手が自分とは違う体験を持っている、経験を持っている。あるいは相手が自分とは違う知識情報を持っている。または相手が自分とは違う物事の解釈の仕方をしている。または相手が自分には無いさまざまな人生の出会いを持っている。そのことによって考え方の違いや価値観の違いが出てくるんだ、と言うことができます。「どうも嫌な奴やなぁ」と思っている状態というのは、相手が自分に無い何かを持っているということなんですね。ですから人間が成長するということを考えた場合に、成長するためには自分とは違うものを持っている人と付き合って、自分に無いものを相手から学ぶということをしないと、人間は逞しく成長していくという生き方を人生においてすることができません。**

**そのためには考え方が違う人は自分には無い何かを持っているんだから、本当は考え方が違う人から何かを学んで、考え方の違う人と付き合って、その考え方の違う人から自分に無い何かを学んで自分が成長していくという、そういう意識を持った生き方をしないと人間は社会の中で逞しくどんどんどんどん成長していくという生き方ができないということになってくるわけですね。そういう意味では対立というのは、自分に無い何かを持っている人が今自分の目の前に居るということを教えてくれる現象だと考えなければならないし、また対立は自分が人間として成長していくために学び取らなければならないものを持っている人間が、誰であるかを教えてくれる現象でもあります。このことを理解することが大事になってきます。対立とは実際に感情的には嫌なものなんですけど、だけども対立なしには人間は本当の実力を持った成長を遂げることができない。本当に社会の中で逞しく成長していこうと思ったら、対立に負けないで対立を通して相手から自分に無いものを学び取って、自分がどんどん成長していく…これが実社会において本当に実力を伴った成長を遂げる人間の生き方であります。**

**とにかく、社会性というものを持って生きるということからよく考えてみてもらいたいことは、考え方が違うということは相手が自分が何かしら学び取らなければならないものを持っているんだ、ということが対立ということの内容なんだということをちゃんと分かってもらいたい。そして人間が成長するためには自分に無いものを持っている人から何かを学んで自分が成長していく、ということが実力を伴った成長というものの具体的な方法なんだということですね。学校なんかでも自分には無い、学生が持っていない知識を持っている先生から何かを学んで、そして生徒も学生も成長していくということになるわけですから。その成長するということはそういうことなんですね。ですから考え方の違う人・価値観の違う人・感じ方の違う人と出会ったならば、「嫌な奴や」と感じるだけではなく、さらにその相手は自分に無い何かを持っているんだと、自分は相手から何かを学ばないと成長しないんだと考えて、対立している相手は実は自分にとっては先生と言えるものであって、何かしら自分が相手から学ばないといけないという…そういうことを対立は自分に教えてくれてるんだという風に考えなければなりません。そして対立を避けて対立から逃げるんじゃなくて、対立に向かって行って「一体こいつは自分に無い、何を持っているんだろう？ 俺はこいつから一体何を学んだらいいんだろう？」と、そういう風な意識で対立する相手と関わるということが、社会性というものを実力を伴ったものとしてつくっていくために必要な努力の仕方だということですね。そして自分に無いものを相手の中から発見して、自分が相手から何かを学ぶことができた場合には、「今日は君と出会えて本当によかった。今日は君と出会って君からこのことを僕は学ぶことができて、こんなことに気づいてこんなに成長できた。ありがとう」と言って、相手に感謝する。そのような付き合い方ができれば、考え方・価値観の違いというのは、決して怖くはない。それは自分が成長することで乗り越えられるもの、ということなんですね。**

**このことができないと、実際問題社会において問題になっている離婚の激増や小児虐待など、不幸な出来事というのはなくなりませんし、また宗教戦争や民族戦争という戦争も乗り越える力を人類を持つことができません。本当に我々が戦争を乗り越えて平和な世界を作っていこう、あるいは家庭が崩壊しないように離婚の危機を乗り越えることができるような力を自分が持とうと考えるならば、考え方の違う・価値観の違う・感じ方の違う人とどうしたら一緒に仲良く生きていくことができるんだろうということをどうしても考える必要が出てくるわけですね。社会性を本当に身に着けるならば、将来結婚をして家庭生活を持った場合でも、離婚の危機というものが出てきてもそれを乗り越えて生きていくことができる力にもなっていくわけですね。とにかく社会に出て仕事する・社会に巣立ってまず身に着けなければならない大切な能力が社会性、という風に言われる生き方だということをまず心して考えてみてもらいたいと思います。**

**残念ながら最近はほとんどの人が理性の奴隷となって理性的にしか生きられないという状態になってしまっています。その結果、社会性ということの重要性が語られなくなってしまいました。またニュースを見ていても、多くの知識人がいろいろと喋ることを聞いていると、社会性という言葉が死語になっちゃったんじゃないかなと思うぐらい社会性という言葉が最近は出てこないのが残念な状況なんですね。実際にその社会性がない故に離婚の激増が止まらない、社会性がない故に戦争はなくならないという状態になってしまっているということが現実であります。**

**そういう意味で、是非、自分自身の人間としての成長のためにも、また平和な家庭を維持するためにもまた世界の平和を実現するためにも社会性を持って生きることの重要性をよく考えてみてもらいたいと思います。宗教戦争を考えた場合でも宗教が違うから戦争をしているということは実際、社会性がないということなんですよね。人間が社会的存在であるとするならば、社会性がないということは、人間性がないということ=つまり、人間じゃないんだということになってしまう。だから社会性という言葉を本当にちゃんと理解したならば、宗教が違うからと言って戦争してるということは社会性がないんであって、社会性がないということは人間性がないんだ。人間性がないということは人間じゃないんだ。「ということは、俺たちは人間じゃなかったんだね」ということになってしまいますから。しかし、その社会性というものをちゃんと自覚するだけでも強力な戦争の抑止力になるという風に言うことができるわけであります。とにかく、社会性というものの重要性をよく理解をしておいてもらいたい。**

**なぜ、対立をしたり戦争してはならないのか、なぜ対立を乗り越えなきゃならないのか、なぜ殺し合ってはならないのか、ということを少し突っ込んで考えてみると、人間の命の根源から湧き上がってくる欲求は、どんな人の命においてもその命の根源から湧き上がってくる欲求というのは、できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいというのが命の叫びなんですね。どんな人でも喧嘩したいとか殺されたいとかそういう欲求が命から湧いてくることはありません。命の根源から湧いてくる欲求はただ一つ。できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたいというのが命の欲求であり、命の叫びなんですね。なぜ、そのような欲求が湧いてくるのかと言ったら、命をつくったのは母なる宇宙の摂理の力だ。母なれば自分自分の産んだ子どもたちが皆仲良く信じ合って生きていくことを願ってるはず。だから母なる宇宙によってつくられた我々の命の根源から湧き上がってくる、「できることなら皆と仲良く信じ合って生きていきたい」という欲求は人間の命に対する、命を産んだ母なる宇宙の願いであり祈りでありというように言わなければならない。そして人間の命に込められた母なる宇宙の願いであり、祈りである思いを実現する生き方が人間的に生きるということの根本原理であります。であるが故に我々は、どうしたら皆と仲良く信じ合って生きていけるのかを理性を手段能力に使って考えて、あれこれする…これが人間的に生きるということの最も大事な根本であります。だからこそ、人間は戦争をして殺し合うという悲しい生き方をしてはならない。対立をして相手を憎しみ合うのではなく、対立を乗り越えてお互いに仲良く、協力して生きる道を探り求めていく…そこに人間的な生き方の根本があります。残念ながら現在は人間が理性化されて、理性的に生きることによって、人間性が破壊されて、そして血の通った温かな心遣いが消えてしまうという状態に多くの人が陥ってしまっているというのが、残念ながら現実の社会の実相であります。**

**そういう意味で、温かな血の通った人間性を持ちながら生きるということは、「考え方が違う人とどうしたら一緒に仲良くやっていけるんだろう」ということを思って、考えて生きること。「考え方の違う人とは一緒にやっていけないよね、そうだよね」では、血の通った温かな心は存在しません。「宗教の違う人とどうしたら一緒に仲良くやっていけるんだろう」と思って試行錯誤と創意工夫をして考えると、そこに血の通った温かな心遣いが生まれてくるのであって、「宗教が違ったら一緒にやっていけるはずはないよね」という理性的な判断には全く血の通った温かな心遣いなんて出てくる余地がありません。これは、完全に血の通った温かな心を理性に売り渡して、理性の奴隷となって人間性をなくした状態の生き方であります。是非、社会の中で生きる基本として社会性が大事だということを強く心に持って仕事をしていってもらいたいという風に思っております。**

**次は第二番目、「自分の価値は他人が決定する」。これも現実の社会の中で働いている最も根本の原理であります。自分がどんなに努力して素晴らしい力をつくっても、現実社会においてその力が他人から認められなければ、その人は現実に一文の価値もない人間だ。現実社会というのは他人から評価されて、初めて給料をもらえて生きていける。他人から評価されなければ、一文の金も入ってこない。だから現実の社会の中で生きていくことはできない。おそらくこれが我々が生きている社会の最も厳しい原則なんですね。自分の価値は他人が決定する。他人から評価されてなんぼの世界、それが社会だ、ということですね。他人から評価されなかったら一文の金も入ってこない。自分がどれだけ努力して素晴らしい力をつくったとしても、それは他人から「すごい！」と言われて初めて価値が出てくるのであって、他人から評価されなかったらどんなに素晴らしいものを持っていたとしても、それは現実の社会を生きる力にならない。社会的にはゼロの人間だということになってしまう。**

**自分の価値は他人が決定するんだから、その上で大事なことは社会の中で生きる基本は、人の役に立つ人間になりたい・人の役に立つ人間になろうという思いですね。また人に必要とされる人間になりたい・人に必要とされる人間になろうという思いが、社会の中で生きる上では非常に大事な心構えになってきます。人の役に立たないようでは社会の中で給料を貰って生きることはできないし、人に必要とされないようでは、何かことがあったら真っ先に辞めさせられてしまって無職になってしまう。人に必要とされるという力を自分の中につくっていかなければならない。ただ自分が努力して能力やいろいろな力を自分が身につけるだけじゃなくて、それをどうしたら人に喜んでもらえるような形で人の役に立たせることができるだろうか、そのように他人の為を考えて自分の能力をどう活かせば良いのかを考えていく。そのようにしないと、社会の中では評価されない。とにかくは、社会の中で生きるためにはまず人の役に立つ人間になりたい・人の役に立つ人間になろうという気持ちが大事ですし、また人に必要とされる人間になろうとする、そういう意欲もまた大事な課題になってきます。**

**次は第三番目です。「人の役に立たない個性は身勝手にすぎない」。個性というのは、社会の中で初めて意味を持ち価値を持つ言葉なんですね。自分一人で生きていくだけだったら個性もへったくれもないと。意味を持つのは社会という場合においてである。人の役に立たない個性というのは社会においては価値がない。人の役に立ってこそ、初めて個性として評価されるものになる。人の役に立たない個性は単なる身勝手でありわがままにすぎないってことですね。これもやっぱり個性の履き違えということがよく社会にはあって、個性だからと言って人に嫌われるような言動をするような人も随分といたりするわけですけども、それは残念ながら個性としての評価を得ることができない。それは単なる身勝手に過ぎない。価値を持つのは人に役に立ってこそ個性。個性ある能力、人には無い自分独特の能力というものも、それが人の役に立って初めて個性として評価される。性格とか人間性というものも個性と言われるものはあるわけですけど、人間性や性格というものもわがままをしている状態ではなく、人に喜ばれる、何かしたら人の役に立つところがあって初めて素晴らしい個性として評価されるということになるわけですね。**

**そういう意味では、自分がなかなか周りから認めてもらえない悩みを持っている人もいらっしゃるかもしれませんけど、その人の持っている個性や良い所がなかなか周りの人から評価されない段階というのは、まだ本人が自分の持っている能力・個性というものを人のためになるような仕方で使おうとしていない。また、人の役に立って人に必要とされるような人間に自分が成長していこうという意欲がなくて、ただ単に自分のことを周りの人が認めてくれない、人の役に立つための努力をしていないという場合が非常に多いわけですね。とにかく個性というものは、人の役に立たなければ価値がない。人の役に立って初めて個性ということができるんだ。ということも、考えておかなければならない問題であります。**

**最近は個性の時代と言われて個性が大事だと言われますので、ついつい自分勝手な身勝手なことが認められると思って個性として主張するような人も随分といるんですけど、残念ながら人に評価されないような、人から認められない個性は、それは決して価値や意味があるものではない。それは決して個性と言うべきものではなくて、単にそれは身勝手でわがままであるだけなんだ。人の役に立ってこそ個性、という評価・認識とちゃんと持っていてもらいたいと思います。**

**次は第四番目ですね、「職業とは人を幸せにすることによって自分も幸せになる活動である」。すべての職業は、他人のために何かをするということで成り立っているものが職業なんですよね。他人のために何かをして、他人が喜んでくれたり、他人のためになったら、そのことによって他人からお金が入ってきて、そして自分の生活ができていくことになってくる…これが職業の社会におけるあり方であります。職業は全て他人のために何かをするということによって成り立つもの。他人のために何かをする、他人が喜んでくれたり、他人が幸せを感じてくれる…そうすることによって、お客さんからその感謝の印として金が入ってくる。その金をもらって自分自身がまた幸せな生活ができる。そういう循環が職業の具体的なあり方であります。**

**自分自身が幸せになりたいということをまず考えると、社会においては必ずそれは他人を犠牲にすることになってしまう。まずは人を幸せにすることによってしか自分が幸せにならない、この社会における原則を忘れてはなりません。まず自分が幸せになりたいと思ったら、そのために他人を犠牲にして、他人を手段にする…そういうことになってしまいやすい。人を幸せにする力を作ることによって、人を幸せにする力を自分で成長させていくことによって、初めて結果として自分も幸せになることができる。それが職業の価値であります。周りの人を幸せにしていかないと、自分自身も幸せにはならない。自分だけが幸せになろうと思ったら、周りの人を犠牲にすることになってしまう。**

**そういう意味で、どうしたら周りの人を幸せにすることができるだろうか。どうしたら周りの人に喜びを与えていくことができるだろうか。そのことを第一に考える、そのことを通して自分自身も人間として成長していくことができるんですね。結果として自分も幸せになれる力が自分の中にできていくことになるわけであります。とにかく、仕事をするということにおいて、職業が人を幸せにすることによって、結果としてその人からその感謝の印としてお金が入ってきて、そして自分も幸せになれる。それが職業というもんなんだと。これも仕事をしていく上での心構えとして持っている必要があると思います。**

**次は第五番目ですね、「職業の目的を金銭と考えると悪賢くなる」。経済社会では仕事をするのは生活をするための金を手に入れるためだ、と一般的に考えていることじゃないかと思うんですけど。お金を目的に人間が仕事をすると利害打算というものを優先するような仕事の仕方になってしまいます。そうするとどうしても相手のためを考えるよりは、自分自身が「どうしたらお金を手に入れることができるんだろうか」ということになり、ついつい自分本位な、自己中心的な思いを持った仕事の仕方になってしまって、お客さんに損をさせるようなことになってしまったり、あるいは周りの人に迷惑をかけるような身勝手なことをしてしまったりということになってしまいやすい。結果として、自分本位と言うか身勝手なことになってしまう。他人を犠牲にする、損をさせる。それにより自分が得をするような、そんな仕事の仕方、生き方になってしまいやすい。結果として自分自身が人間性の歪んだ状態になってしまうことになるわけですね。**

**往々にして資本主義経済というのは、金のために働く体制になっておるものですから、競争をして勝つということから自分自身が金の奴隷になってしまって、血の通った温かな心遣いを忘れてしまって、理性的に計算高い自分自身が儲かるような仕事の仕方を考えてしまいやすいですよね。それがいわゆる悪賢いという、自分が得するために計算高い身勝手な仕事の仕方をしてしまう。そのことによって周りの人に嫌な思いをさせたり、また相手に損をさせたりということになってしまって、結果として金を目的にした仕事の仕方が自分自身の人間性を悪くしてしまって、うっかりすると犯罪に絡んでしまうようなことにもなってしまいやすい。これは経済界において起こるさまざまな事件や犯罪になってしまう出来事を見ればすぐわかることですけど。お金のために人間性が歪んでしまった、そして多くの人に損害をかけてしまうという経済活動が現実にも多々あるわけであります。そういうことから考えると、「一体我々は何のために仕事をするのか」、「仕事の目的はなんなのか」ということもちゃんとわかっていなければならないことであります。**

**そういうところから第六番目の話に入るわけですけど、「.職業とは、その仕事に従事する人間を、人に喜んでもらえるような仕事の仕方が出来る能力と人間性を持った本物の人間に育て上げる働きをしている」。職業というのは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をすることによって成り立つ活動なんですよね。人に喜んでもらえないような仕事の仕方をしていたのでは、会社は潰れますし、注文はこない。基本的に仕事というのは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をすることが基本の課題だ。すべての職業というのは、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に育て上げる、その働きをしているものが職業というものなんだということを我々は知っていなければならない。本当に真剣に仕事というものに打ち込めば、そのことによって必然的に人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力も成長するし、また人間性も成長していって、人間として本物と言われるような状態になることができる。人に喜んでもらえるような仕事の仕方というのは、単にお客さんに喜んでもらったら良いだけの話じゃなくて、一緒に仕事をしている仲間にも喜んでもらい、感謝してもらえるような仕事の仕方をすることが、仕事の仕方の基本であります。お客さんにも仲間にも喜んでもらえるような仕事の仕方をする能力と人間性をつくっていく。お客さんにも仲間にも喜んでもらえるような仕事の仕方をすることができる能力を作っていく。またそういう人間性をつくっていくことが、仕事をする場合の大きな目標と考えなければなりません。**

**人間の成長は、能力だけではなく人間性というものにおいても成長していかないと、全体的に人間としての成長を意味するものとはなりません。案外と成長と言うと、能力の成長ということだけに偏って考える場合が多いんですけど、具体的には仕事を通して自分自身を成長させていくことというのは、いろんな人間関係の中でも自分を鍛えていかなきゃなりません。ただ能力だけではなくて人間性というものも成長させるということをちゃんと自分自身が自覚してないと、能力の成長だけで終わってしまって、仕事として自分自身の人間性を鍛えて、人間性を成長させていくというような生き方が、忘れられてしまっていることが多いんですよね。特に仕事を通して、能力と人間性を成長させていく、そのことが仕事というものを通して自分自身が本物の人間になっていく課題なんだとわきまえておいてもらいたいと思います。**

**実際問題、仕事においてはさまざまな人間関係の問題が出てくるわけですけど、仕事の中から出てくる人間関係の問題も、また仕事上の問題も、全て自分自身を成長させてくれるために出てきている問題なんだ、と考えなければならない。問題とは、嫌なもんでついつい問題を避けて通りたくなるもの。見て見ぬふりをしてしまう場合が多いんですけど、だけど問題とはなぜ出てくるのか。それは自分自身を成長させるためだ。また問題や悩みは会社を発展させるためだ。そのように考えていかないと、問題や悩みを通して自分自身が成長していくということはありません。**

**なぜ、問題や悩みが自分や会社を発展成長させるために出てくるという風に言うことができるのか。それは問題と悩みがなかったら、「今のままでもういい」となってしまって、人間は努力をしません、成長しません。だけど、問題や悩みが出てくるから、「このままではいけない」となり、どうしようかとなって、人間は能力においても人間性においても成長していくことになるわけであります。だから家庭における問題もそうですけど、会社における問題も悩みも全て自分自身を成長させてくれるために出てきてくれてるんだと。問題から逃げないで、問題を引き受けて、その問題をどう乗り越えていくかを考えていくという仕事の仕方をする必要があるわけですね。問題は、今真っ先に何をしなきゃならないかということを教えてくれる。会社においても、今何を優先的に取りあげ、解決していかなきゃならないのかを教えてくれるために問題は出てきてくれてるんだと、考えなければなりません。**

**ついつい問題を先送りして、問題を避けて通って、問題の出てこない道ばかりを探し求めていくと、問題がそのままどんどんどんどん大きくなっていってしまって、処理することができないほどの大きな問題となって、先に進んでいけないような挫折を体験することになってしまいやすいわけであります。問題は、今真っ先に何をしなきゃならんかを教えてくれるために問題が出てきてるんだということを考えて、問題を避けて通らない、問題が出てくることを恐れないというような生き方をしていかないと、能力においても人間性においても成長することはありません。問題が出てこないことを願ってはならない。問題が出てくることを恐れてはならない。また問題が出てこない道を探し求めることをしてはならない。**

**案外と理性的な人は、問題が出てこない道があるはずなんだと思って、問題が出てこない道を探し求めて、問題が出てきたら「これは間違ってるんだ」と思ってやめてしまう…そんな仕事の仕方をしてしまう人も多いんですね。「問題が出てくる道は間違った道だ、問題が出てこない道を進んで行かないといけない」と思ってる人が案外と多いんだけど、問題が出てこない道は堕落の道、問題が出てこなければ成長しない、問題が出てくる道こそ、まさに人生の王道、宝の道。成長していくことができる道なんだ。このことも仕事をしていく上で忘れてはならない重要な原理なんですね。問題が出てくる道こそ人生の王道である。問題を乗り越えることによってしか人間も会社も発展しない。問題の出てこない道を探し求めてはならない。**

**多くの人が早く問題と悩みがなくなってもらいたいという思いを持ってる人が多い。ついつい問題と悩みを避けて通ると言うか、問題と悩みを嫌うような仕事になってしまいやすいんですけど、だけど問題と悩みがなくなることを願うのは、単に楽がしたいだけの人生。楽がしたいだけの仕事の仕方になってしまうんですね。早く問題や悩みがなくなってもらいたい、これは明らかに人生からの逃げであり、仕事からの逃げである。「安逸を貪り易きに流れる」人生だ。そういう問題から逃げるような生き方をしては、現実の社会において本当の実力を伴った成長というのはありえません。成長するということは問題を乗り越えていくことであって、問題を乗り越えるという形でしか実力はつかないんですね。問題のない道を探し求めていたのでは、実力は成長しません。今の自分の持っている力でできることしかしようとしない。今自分の持ってる力でできないことはできませんと言って断ってしまう。そういう仕事をしていたら問題はないかもしれませんけど、それでは成長はあり得ない。自分の能力が伸びない、結果としてだんだんだんだん役に立たなくなってきて、時代遅れの人間になってしまう。そういう意味においても、問題と悩みが出てこないように願うような弱い生き方をしてはならない。仕事から出てくる問題、人間関係の悩み、それこそまさに自分自身を能力においても人間性においても成長させてくれる重要な課題なんだ。そう考えて問題や悩みから逃げない強い生き方をしていかなければ、仕事において成功する力というものを自分のものにすることはできません。そういう生き方をすることによって、我々は人間として本物という実力を伴った成長を遂げることができるわけですね。**

**人間が本物になるためには二つの条件があるんですね。人間が本物になるためには、人間の本質と社会の本質をちゃんと掴むことが大事であります。違った表現をすれば、人間が本物になるためには、人間と社会の実態に触れることが非常に大事な課題である。人間社会の本質、社会の実態とは一体なんなのかと言ったら、社会がどんなに恐ろしいものなのか、社会とはどんなに醜いものなのか、社会とはどんなに怖いものなのか、また社会とはどんなに素晴らしいのか。この社会の本当の恐ろしさと醜さと怖さと素晴らしさに命が触れる体験をもって、初めて人間は本物という状態に磨かれ、成長していくことができる。また人間というのはどんなに恐ろしいものであるか、どんなに醜いものなのか、どんなに怖いものなのか、またどんなに素晴らしいものなのか。人間の本当の醜さと本当の恐ろしさに命が触れるという体験をもって初めて、人間は命の根底から成長していく、そういう本物性を獲得することができるわけであります。人間が本物になるためには社会と人間の実態に触れることが条件である。社会と人間の本当の恐ろしさと素晴らしさに命が触れる体験によって初めて、命はその根底から鍛えられ磨かれ成長していく。そして本物になることができる。**

**実力というのは命に痛みを感じるような体験がないと、実力はできないんですね。本当に追い詰められて、どうしようもないような状況で苦しむという本当に命の根底から苦しい辛い思いをすることがあって初めて、命は鍛えられるのであって、命に痛みを感じないような、そういうレベルの体験というのは、どれだけ体験を積んでも本当の人間の命の成長には関わらない。どういうことなのかと言ったら、自分の今持ってる力ではどうしようもないという追い詰められた状況に立たないと、人間は本当の真剣さを体験することはないんですね。今自分の持っている力で解決することができる程度のレベルの苦しみや問題であった場合には、今自分の力で何とかなるもんですから、本当の命の成長と言えるものは出てこない。また実力が成長することはない。**

**そういう意味で、本当に人間が本物という状態で成長していくためには、社会と人間の本当の醜さと恐ろしさと素晴らしさに命が触れる体験が、非常に大事なことになってきます。では、どうすれば我々は社会と人間の本当の恐ろしさ、醜さ、怖さ、素晴らしさに命が触れるのかと考えると、我々はまずプロとしての仕事を持って、そして生活をかけ、人生をかけ、命をかけて働くことが求められます。プロとしての仕事を持って、弱肉強食・利害打算の働くこの娑婆社会の中で生活をかけて働く、人生をかけて働く、命をかけて働く、そのことによってようやく我々は社会の本当の強さに出会うことがある。また本当の人間の醜さに出会うことがある。また本当の社会と人間の恐ろしさに出会うことがある。また社会と人間の本当の素晴らしさにも出会うことがある。そのことを通して、我々は社会とはこういうもんなんだ、人間とはこういうもんなんだってことを本質から知ることができて、そしてその社会の中で人間として生きているためにはどうしたらいいのか、という人生を生きる本物の実力を手に入れることができるわけであります。そういう社会と人間の本当の恐ろしさと素晴らしさに命が触れる体験がないと、弱肉強食・利害打算による社会をたくましく生き抜いていく実力というのは、なかなか出てこない。結果として、いろんな問題や悩みにぶつかって、偽物はそこで挫折して消えてしまう。本当に人生というものを勝ち抜き、生き抜いていく実力を身につけるためには、社会と人間の実態に触れるという体験が欠くことのできない重要な要素であります。**

**実際問題、実業界において本当に成功と言える成果を手に入れることができた人物というのは、皆、本当に底知れないさまざまな苦難・問題を乗り越え続けてきた人たちなんですよね。普通では考えられないような辛い苦しい状況を通り抜けていかないと、人並外れた人生の成功を手に入れる実力は手に入りません。とにかく成功した人は問題や悩みを乗り越え続けた人だけなんですよ。そのなかでも本物と言える人達は皆、社会と人間の本当の恐ろしさ・醜さ・強さ・素晴らしさを感じるような体験を積み重ねてきて、それに負けないでそれを乗り越えて、自分というものを今日まで作り上げてきた実力が、本物と言われるものになるわけであります。そういう意味においても我々は、仕事を通して自分の能力と人間性を成長させていく。仕事から出てくるさまざまな問題や悩みを自分を成長させてくれるために出てきたものとして受け止めて、問題や悩みを乗り越えるための努力をすることによって、自分自身を仕事を通して鍛えていくことを常に忘れてはなりません。**

**仕事こそ人生最大の道場だ。弱肉強食・利害打算の働く娑婆社会の中で、我々は仕事をすることによって初めて社会的存在として人間として本当の生きる力・実力を手に入れることができる。職場こそ最大の道場だ。これからは男性だけではなく女性も社会の指導者として力を発揮しなければならない、そういう時代をこれからは迎えるわけです。どんどんと女性がいろんな職場に進出していって、女性が職場の指導者となって活躍することも随分と増えてきました。その意味においては、女性もやはり自分自身を人間として鍛えて鍛えて鍛え抜いていくという自覚を持って仕事をしてもらいたいと思うんですね。20世紀の中頃までは女性の方はあんまり社会的に重要な地位に就くことができなくて、ついつい家庭に居場所を求めるようなそういう状態になっておりましたけども、これからは女性が持っている潜在能力が新しい時代を作るためにどうしても必要だという状況が出てきております。そういう意味では、20世紀までは女性は男尊女卑と言うか、男性によって支配される社会的な構造があって、あまり自分の能力を発揮することができませんでしたけど、ようやく男女平等という意識もあって、女性が持っている潜在能力がどんどんどんどん出てきて、男性がつくってきた社会と全く違う新しい価値観や質の社会をつくっていくことができる力が、女性には存在するわけであります。これからこそ、女性がもっともっと社会においても仕事においても活躍をして、そしてそのすごい力を発揮してもらいたいという風に願っております。これまでの3000年間は、ずっと男性支配の社会でしたが、ようやく21世紀なって、女性が底力を発揮するような環境がどんどんと社会において出てきておりますので、女性の方がもっともっと人間として本物になるという思いを持って、活躍してもらいたい。その力を子どもを育てることにも、家庭というものをより素晴らしいものにするためにも力を出してもらって、男性と女性の対立を乗り越えて、協力し合いながら新しい時代をつくっていくという状態に社会を持っていってもらいたいと思います。**

**とにかく女性も男性も仕事を通して自分を磨いて、人間として本物と言われるような状態に成長していってもらいたいという風に思います。これからの新しい時代をつくっていく、アジアの時代をつくっていくための重要な課題だという風に言うことができるんじゃないかと思うんですね。「仕事をする上で職業とは、その仕事に従事する人間を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間に育て上げる」、そういう働きを職業はしているんだという意識を持ちながら、仕事をやってもらいたい。**

**仕事こそ人生最大の道場だ。人間が本物になるためには、仕事を通して社会に触れて、社会の中で自分自身を社会性を持った人間として成長させていく課題に挑んでいってもらいたい。社会性というのは考え方が違う、価値観が違う、感じ方が違う、宗教が違う、そういう違いがあっても共に協力して助け合って生きていくことができる能力と人間性を持った本物の人間、それをつくるのは職業・職場というものであって、そういう意味で職場は道場だと言えるのです。**

**それでは後半の話に入ります。**

**次は第七番目ですね、「何の為に働くか。それは自分を社会性のある本物の人間に鍛え上げる為である」。これは最近、そういうテーマの本も出ておりますけど。働く目的というのは単に金銭のためだけではなく、とにかくは働く最終的な目標である“自分自身を社会性のある本物の人間に鍛え上げるためである”という意識を持って、我々は仕事をしなければならないと思います。**

**職業とか仕事というものの優先課題は、人に喜んでもらえるような仕事の仕方をするということが仕事の第一条件であります。人に喜んでもらうような仕事の仕方ができた結果、入ってくるものが金銭である。そういう関係性ですから、まずはお金を得るためにも第一番目にしなきゃならんことは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性をつくることが、仕事をすることの目的であって、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる本物の人間になれば、そのレベルに応じてお金が入ってくるという構造になるわけであります。お金というのは、自分自身が人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間にどれだけなったかによる結果として、入ってくるお金の量が決まるという風に言っても過言ではないと思います。自分自身を人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間成長させることが、仕事をする職業の第一番目の目的だと言わなければなりません。**

**では、具体的に人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間とはどういうものなのか、ということを次に考えていく必要があるわけですね。仕事を通してどういう人間性をつくっていくのかということなんですけど、感性論哲学では、人間が人間の格というのを持つためには三つの条件があると話をしております。**

**我々人間がまず初めに持たなければならないものは、不完全性の自覚である。これが、宗教という文化を持つことになって生まれてきた人間性に対する最初の目覚めなんです。ここから、動物ではなく人間として成長していく流れに入ります。人間はあらゆる意味において不完全だとちゃんと自覚して生きることが、人間に求められる本物の人間における第一原理である。本物の人間と表現する内容は三つあります。**

**それはどういうことなのかと言ったら、第一番目は人間は不完全な存在であるから不完全性の自覚というものが非常に大事であるということ。不完全性の自覚というものから滲み出てくる謙虚さというものが、まず人間が持たなければならない人間性の第一条件だと話をしてるわけであります。謙虚さというものがない人間、傲慢な人間というのはお客さんから嫌われ、同僚からも嫌われる。そういう意味では、謙虚さこそ我々が仕事の中で身につけていかなければならない人間性というものの、第一番目の課題だと言うことができるわけですね。社会に出てまず我々が自分の人間性として身につけなければならないものは、謙虚さである。人間は傲慢になったとき、人間であることを根底から失格する。傲慢さほど醜いものはないし、傲慢さほど恐ろしいものはない。いろんな社会において地位を得た方々が失脚するのは全て傲慢さからなんですね。傲慢さが敵をつくり、傲慢さが内部告発を誘発し、傲慢さが対立をつくり出してしまう。人はその地位を追われる。**

**謙虚さというのは傲慢ではないということなんですけど、だけども自分自身がいろんな考え方とか主張を持っても、反対意見を押し切って自分の考えを相手に説得して主張し続けるのではなくて、相手の考えも参考に取り入れながら、自分の考えを成長させていく気構えを持っていなければならない。理性というものの使い方に非常に大きな問題があるわけですけど、どうしても我々は自分の理性で考えて正しいと思うことは、とことん主張して押し通してしまいがち。他人が反対してもそれを押し切って、自分が信じるところ、自分が正しいと思うことを主張し続けて、簡単には折れない・譲らないという生き方が人間として正しいと言われてきたのが、これまでの時代のやり方でした。**

**だけども、我々の考えというのは、自分の立場から考えたらそのように考えられるというものですが、理性で物事を考えるということは、その結論は全て偏見になるということも我々は考えなければなりません。どんな立派な人でも自分の肉体のある場所からしかものは見えないし、自分の肉体のある場所でしか考えられないし、自分の肉体のある場所でしか判断できない、という限界が理性にはあります。このことから人間には偏見が出てくるわけですね。偏見とは、間違った考えではなく、正しいんだけど偏ってる・歪みがあるもの。理性能力には限界があるということを我々はちゃんとを意識する必要があり、自分がどんなに正しいと思っても、それは自分の肉体のある場所でしか判断できない、自分の肉体のある場所で考えたことなんだ、というところから人間の考えには全て偏見がつきまとうっていうことを忘れてはならない。**

**偏見という偏った考え方のまま、ことを押し通すことはできませんので、どうしたらその考え方の偏り・歪みを修正できるかを考えなければならない。自分の考えの偏りを修正するためには、自分と違った考えを参考にして自分と違った考えを取り入れることにより、自分の考え方の偏り・歪みを修正するという意識を持たなければならない。これは、アジアには「三人寄れば文殊の知恵」という言葉があって、三人の三つの違った考え方を統合すれば、文殊の知恵すなわち仏の知恵に近づくことができるという考え方があります。欧米人は考え方が違ったら、どちらが正しいか決着をつけるという考え方。結局は対立するんですけども、アジアにおいては対立を乗り越えて、三つの違った考えを統合しないと本当の正しい考え方には近づけない、という考え方があるわけであります。**

**その意味では、これまでは欧米的な真理は一つなんだから、違った考え方があれば、どちらが正しいか決着をつけるという形で対立をして、自分の考えで相手を説得するやり方が行われてきたんですけども、これからはアジアが世界の文明の中心となって、アジア人の考え方が欧米人に伝わっていって、アジア人が欧米人を教育し、指導しながら新しい時代をつくっていくことになっていくわけですね。そういう意味においては、これからの時代を生きるためには、アジア的な価値観というものを身につけなければならない。それが三人寄れば文殊の知恵という言葉であります。自分ひとりの考えでは、どんな立派な人の考えでも偏ってる。偏見という状態にある。そういう考え方の歪みや偏りを修正しようと思ったならば、自分と違うあと二つの考え方を探してきて、三つの考え方を統合して結びつけることによって、最終的な判断を下す。これが考え方の歪み・偏りを修正して、人間としてより正しい考え方に近づいていくという方法なんですね。**

**なぜ、三人の考え方を統合しなきゃならないのかと言ったら、社会とは一人称二人称三人称という構造で成り立っておって、自分の立場から見たらこう見える、相手の立場から見たらこう見える、第三者の立場から見たらこう見える、三つの立場からの考えを統合することによって、初めて生きた社会の現実がわかるから。これが、学問的に生きた現実を把握する場合の方法論であります。現実の社会がそうであるならば、アジア的な「三人寄れば文殊の知恵」はまさに当てはまる言葉なのです。自分の考えがどんなに正しいと思っても、それは現実に偏見なのであって、自分の考えというものをより正しい方に近づけようと思ったのならば、自分と違う二つの考え方を持ってきて、三つの考え方を統合して、自分自身の最終的な判断を下す。このやり方を我々は身につけていかなければならない。こういうことをするのならば、我々は自分と考え方が違う対立する相手ともお互いに協力し合いながら、またお互いに教え合いながら、共に成長することも可能になってくるわけですね。**

**我々は自分自身の考えに執着し、こだわるんじゃなくて、自分自身の考えも大事だが、他の考えも取り入れないと、自分の考えの歪みを修正できない。そういう謙虚な意識を持つことができることになるわけであります。そのためには理性という能力には限界があることをちゃんと理解しておく必要があるわけですね。これまでは理性能力というのは、合理的に考えることができる素晴らしい能力だと言われてきたのですが、これからは理性能力というのは合理的にしか考えることができない有限で不完全な能力なんだ、という理性に対する意識を持って理性を使っていかなければなりません。理性を使って出した結論でも、決して完全じゃない、絶対じゃない。必ず何かしら欠けているところがあって、歪みがある…そういう自覚を持って、我々は他の人の考えを否定しないで、それを自分の考えの中に取り入れながら自分の考え方の歪みを修正していく。そういった謙虚な使い方をこれから我々は身につけていかなければなりません。**

**謙虚な心というものが人間性、人間らしい心の本質になければならない、ということをちゃんと心得て、社会の中でのさまざまな人間関係や議論に関わっていくということをする必要があります。だけども、謙虚さだけでは人間性は決して完成されたものではない。謙虚さはうっかりすると弱さになったり、媚びへつらうことになったりしてしまう。謙虚さというものの背後には自信というものがないと、本当の謙虚さの価値もなくなってしまうんですね。自信と謙虚さは一対となって初めて社会を生きる力となる。という意味でも、人間の格という人間性をつくっていこうと思ったならば、「謙虚であれ」だけではなくて、自信をつくる努力をする必要があるわけですね。謙虚さは不完全性の自覚から出てくるわけなんですけども、自分が不完全だということは、完全なるものを意識してないと自分は完全ではないという意識が出てきませんので、不完全性の自覚を持っているということは、一方で完全なるものを意識できているということを同時に意味するわけです。人間というのは、不完全でありながらも完全を目指す。不完全でありながらも完璧を目指す。不完全でありながら絶対を目指すという生き方をすることができる。だけども絶対に完全にはならないし、完璧にはならないし、絶対にはならない。それが人間が不完全だということの意味です。だけども、人間はただ不完全であることに安住しているんじゃなくて、不完全でありながらも完全・完璧・絶対を目指すという生き方をするところに、また人間というものが持っている独特の生き方があります。これを短い言葉にすると、「より以上を目指して生きる」という生き方になるわけです。これが、人間が成長意欲を持って能力においても人間性においても成長していく・成長していきたいという欲求になってくるわけであります。**

**謙虚さも大事なんだけど、能力においても人間性においてもより以上を目指して生きる。もっともっと人間として成長したいという成長意欲があるということも人間の格というものをつくる第二番目の条件として大事な課題であります。謙虚さと成長意欲。不完全でありながらもより完璧を目指すこと。人間は不完全だから完璧にならないんだけど、完璧を目指す。そういう状態を「より以上を求めて生きる」と言うんですね。これが人間にとって成長意欲が出てくる根本原理ですし、また人間がいろんな意味で欲求を持つということも根本原理であります。もっといい家に住みたい、もっといい車に乗りたい、もっと頭が良くなりたい、もっと速く走りたい、そういう欲求が命から湧いてくるわけですけど、そういう命から湧いてくる根本原理が不完全でありながらも完璧を目指すという、「より以上を求めて生きる」という精神構造が人間的な欲求が湧いてくる背景にあるわけであります。**

**そういう意味において、人間が人間の格を持って生きるためには、謙虚さと成長意欲を持って生きるということが、第二番目の人間の格をつくる原理なんですね。この成長意欲を持って生きることにより、我々は能力においても人間性においても成長していくことになっていって、いろんなことをする自信を手に入れることができるわけで、成長意欲を持って生きることに自信が生まれてくる。能力においても成長し、人間性においても成長するから人生を生きる自信が生まれてくる。自信と謙虚さは一対となって初めて人生を生きる力になっていく。社会を生きる力になっていく。そういう構造なんですね。自信だけでは自信過剰になってしまう。それでは他人から非難される。謙虚さだけでは弱さになってしまう。自信と謙虚さは一対となって初めて人生を生きる力になっていく。自信があって初めて謙虚さも意味を持ってくる。自信のない人間が謙虚になる、そんなこと当たり前。自信があるのに謙虚にすることによって価値がある。謙虚さも自信が背景にあってはじめて謙虚であることに意味が出てくる。表と裏の関係にあるわけですね。**

**もう一つ、人間が人間の格を持って生きる、犬猫ではないという三つ目の原理は、愛であります。人間は社会的存在だというところから出てくるわけなんですけども、社会の中で人間が生きるためには、人の役に立つことを喜びとする感性がなければならない。この感性なくしては、あらゆる職業は成功することはない。人の役に立つことを喜びとする・嬉しいという気持ちがあって初めて人を幸せにする仕事の仕方ができることになるわけですね。人の役に立つことを喜びとする感性を愛と言います。愛とは、人の役に立つことを喜びとる感性である。**

**愛を職業において具体的に表現すると、「人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間になろうとする」これが具体的に職業において、人の役に立つことを喜びとするという愛を表現した言葉になるわけですね。これが、愛の実践という風に言うことができるものであります。愛を持って仕事をすることは、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる能力と人間性を持った本物の人間になろうとして仕事をする。ここに職業と愛の実践という意味が出てくるわけですね。とにかく、人間は犬猫ではない。人間の格→人格を持って生きる、人格を持って仕事をする…人格というものを仕事を通してどのようにつくっていったら良いのか、我々は仕事をしながら傲慢ではない謙虚な心をつくる。そして人間としてもっともっと成長したい気持ちを持って、能力においても人間性においても、人に喜んでもらえるような仕事の仕方ができる人間へと成長していく。人間としての成長意欲を持って自信をつくっていく、これが人間の格をつくっていく第二番目の原理ですね。第三番目の最後の原理は、愛である。人の役に立つことを喜びとする感性が愛なんですね。この三つが整うことによって、人間には人間の格というものが生まれてくる。謙虚さと成長意欲と愛。我々は仕事を通して仕事の中で実践的に身につけていき、意識をして努力をする必要がある。それなしでは、成功はできません。結果としてその仕事において成果が出て成功するというそういう状態になっていくわけですね。社会の中で仕事をして成功したいと思ったならば何が必要なのか。それには、謙虚さと成長意欲と愛。この三つが人間の格というものをつくる基本原理ですね。**

**本物の人間というのは、ただ人間の格を持っているだけではなくて、人格を磨くことをしないと本当に本物と言うことができるような人間にはなりません。本物と言われるような人格に成長していこうと思ったら、何が大事なのかと言うと、人格には高さ深さ大きさという成長の目標があります。人格の高さ深さ大きさを追求していくことによって、我々は人格を磨くことができる。その努力をすることによって、人間として本物という風に言われるような魅力が出てくることになるわけであります。人間として本物になるためには、まず人格をつくって、さらに人格を磨く努力をする。そのことによって我々は人間として本物と言えるような魅力を持った人間になれる。**

**では、人格の高さとは一体何なのか。別の言葉で言ったら、高貴なる精神。では、高貴なる精神とは一体何なのか。結論的に言うならば、高貴なる精神とは、どこまでもより高度なものを追求していきたい。どこまでもより厳密なものを追求していきたい。どこまでもより真実なるものを追求していきたい。どこまでもより善なるものを追求していきたい。どこまでもより美しいものを求めていきたい。そういう精神を高貴なる精神と言うんですね。これも渦中の情熱と言うんですけど、これを持って我々が生きることによって、その人の中に高貴なる精神は宿るということになるわけですね。**

**本当に我々は人間として本物という風に言うことができるものを目指すなら、まずは人格の高さ、渦中の情熱、どこまでもより高度なものを追求していきたい。どこまでもより厳密なものを追求していきたい。どこまでもより真実なるものを追求していきたい。どこまでもより善なるものを追求していきたい。どこまでもより美しいものを求めていきたいという思いを持って、仕事をするということが、自分自身を人間として本物に成長させていく、まず第一番目の課題であります。男性によらず女性によらず、人間として自分自身を成長させていくための大きな目標であり、また成長の原理なんですね。仕事をする全ての人が自分自身の成長の目標として、どこまでもより高度なもの、厳密なものを求めていきたいという気持ちを持つ必要がある。どこまでもより真なるもの、善なるものを求めていきたいという思いを持って仕事をすることが、プロとして本物の仕事の仕方をしていくための課題であります。**

**では、今度は深さとはどういうものなのか。一体人間はどこまで深くになれるんだろうという思いを持って、仕事をするということですね。お客さんや周りの人間から「なんと深いんだ」と言ってもらえるような人間になるためにはどうするか。どういう仕事の仕方をしたらいいのか。仕事として、深さをつくるとはどういうことなのか。深さというのは心の中にできていく構造ですので、基本的に目が外を向いてる間はなかなか深さはできないです。深さをつくろうと思ったら、外を向いている目が自らの内心を覗き込むと言う、内省自省の目に変わる…自分の心の中を覗き込むというものに変わることによって、心が掘り下げられていく。このことによって心の中の深さという構造が生まれてくるわけですね。外に向かってる目が自らの内心を覗き込むという内省自省の目に変わる。そのためにはどうすればいいか。どうすれば外を向いている目が内省自省の目に変わるのか。そのためには、物事がうまくいかなくなって、スランプに陥ったり失敗をしたり、挫折をしたり壁にぶつかったりして悩む…そういうことがあって初めて人間は外に向かっている目を自らの内心に向けて、内省自省という活動する。それにより自分自身を反省して、そしていろんなことに気づいて、人間は深さを獲得していくことになる。**

**そのために大事なことは、さまざまな問題や苦しみや悩みにぶつかること。なかなか前に進んで行けなくなってしまって、「どうしたらいいんだろう」と、問題や悩みや苦しみにぶつかることが、深さができていくためのきっかけなんですね。そして自分がぶつかった問題や苦しみや悩みから逃げないで、「どうしたら問題や悩みを乗り越えていくことができるんだろう」と、そういう努力をしていくことによって、いろんなことに気づくんですね。この気づきによって深さがつくられていくんですね。「あ、そうか」と言うね。そういう気づきが湧いてきて、今までよりも物事が深く理解できる。そういう力が湧いてきます。深さには気づきや知恵が湧いてくる、命から気づきや知恵が湧いてくることになると、深い所から湧いてきますので、その構造が深さをつくっていきます。**

**そのために我々は問題や悩みにぶつかって、問題から逃げない人生態度を身につけていかないと深さはできない。仕事や人生において「逃げない」という気構えが、深さというものをつくっていくためにまずは求められる人生態度であります。ちょっと逃げたいという気持ちができたら、もう深さはできないですし、自分の底力は湧いてこないです。誰かに助けてもらいたいという依存心が出てきたら、もうその人は深さを身につけることはできません。逃げたいという風に思ったらもう深さはできないです。何とか乗り越えていきたいという、そういう気迫が自分の命から気づきや知恵や底力を湧き出させることになって、その命の根底から湧いてきたものが、その人の深さを作ってくれます。深い人間になろうと思ったら、悩みや苦しみや問題にぶつかることが非常に大事な課題なんですね。**

**でもただ問題や悩みにぶつかることだけではなく、問題や悩みにぶつかったときに逃げないで、問題や悩みを引き受けてなんとか自分自身の力で乗り越えていこうとする気迫・気構えがないと、深さははできません。内省自省、反省をして、そしてそれまでわからなかったいろんな気づきを持つことができれば、そのことによって深さができてくるということになるわけですね。その意味においては、深い人間になろうと思ったら、苦しみや悩みや問題にぶつかるということが非常に大事な原理であって、問題や悩みや苦しみから逃げないという気構えが、大事だということになってきます。**

**一体人間はどこまで深くになれるのかを考えていくと、人間の意識において最も深いと言える段階というのは、自分の命が宇宙と繋がったと言える意識が芽生えたときに、人間は最も深いと言える状態になることができる。自分自身の命が宇宙と繋がったと、このときに最も深い状態に到達することができる。どうしたら一体我々は宇宙と繋がることができるのか。本来、命は宇宙と繋がっているものなんですね。我々一人ひとりが皆、大宇宙の一部を占めているわけであって、つまりは我々が大宇宙なんだ。命そのものは本来、そういうものなんですが、人間が理性で生きているということになってしまうと、理性で自分自身の考えというものを持っていろんなことをしてしまうと、結果として宇宙と繋がった命というものが見えなくなってしまう。それにより、人間の小賢しい、作為によって生きる状態になってしまう。だけども、自分の理性では何ともならんという問題にぶつかったときに、何とかしようと思って頑張っていると、知恵が湧いてくるという構造が命に出来始める。この状態になったとき、我々は宇宙と繋がることを体験することができるわけであります。湧いてくる気づきや知恵というのは、宇宙の力が自分の命の中に働いて、人間の理性を超えた解決策、能力を引き出してくれる。だから、自分が小賢しい、作為的な生き方をしている限り人間は宇宙とは繋がらない。今自分の力で何とかできるということしかしないようでは、宇宙とは繋がらない。自分の理性では何ともならんという問題にぶつかったときに、何とかしようと思って頑張っていると、知恵が湧いてくるという構造が命に出来始め、「深いことを言うな〜」という人間になります。これが深さをつくる方法論であります。**

**次は、人間には大きさという魅力があるという話です。でっかい人間。高さ、深さときて次は大きさという魅力。大きさとはなんなのかというと、器が大きい、包容力がある、統率力がある…これらが人間の大きさというものです。大きな人間になろうと思ったらどうすればいいのか。高さと深さは自分ひとりの努力でどうにでもなるのですが、人間の大きさという実力は人間関係の修羅場を通り越してこないと、本当の大きさという実力を持った人間にはなれません。人間関係の修羅場=対立ですね。対立から逃げないでそれを乗り越えてやってきた人間だけが、大きさという魅力を持った人間になれる。「なんて器が大きいんだ」と人に大きさを感じさせる人間になるためには、対立という修羅場をくぐり抜けてきて、逃げないで乗り越えてきたことによってつくられたものが、大きさなんですね。**

**そのためには対立を乗り越える実力を身につけないと、大きな人間にはなれない。対立から逃げないで対立に向かっていて、さらにその対立を乗り越えていく努力をする必要がある。対立を乗り越えるとはどういうことなのか。対立とは相手が自分にないものを持っているんだから、自分の持ってない、相手が持っている自分にはないものがなんなのかを探り当てていって、そして対立する相手から自分にないもの学び取って、自分を成長させていくというのが人間を大きく成長させていく原理なんですね。他人から学んで、そして自分の中にそれを取り入れて、自分が成長していく。それによって、だんだんだんだん大きさというものを持つ。他人から学ぶということは、相手のことを理解する力がだんだんできてくるわけですね。それにより、どういう人間と出会っても、必ず相手から何かを学んで自分自身が成長していく。そういう生き様を自分のものにすれば、人間は限りなく大きくなっていく。人間性の豊かさ、幅ができていく。他人から学ばないと大きくなれない。しかも対立という状況を乗り越えるための方法として相手から学んで、敵に感謝するということも人間の大きさをつくっていくことができるわけですね。「君からこれを学んで僕はこんなに成長できた。ありがとう。感謝するよ」と相手に言えるかどうかなんですよね。どんな人のことでも誤解することなく正しく理解することができる能力と人間性を器と言います。器が大きいとは、入れ物が大きいということ。つまり、どんな人のことでもちゃんと誤解することなく理解することができる。それを器と言います。**

**また度量のある人間というのは…、度量というのは「あの人はこういう考え方を持っているのに、それとは違った考え方をも許して付き合うことができている。なんて度量が大きいんだ」という表現になります。そういうものを自分の実力として身につけていくためには、自分の考えを相手に誤解されることなくわかってもらえる力をつくらないと、度量にはならない。器の大きさをつくった上で、どんな人のことでも誤解することなく理解することができる能力と人間性という器をつくった上に、今度は自分のことを相手に誤解されることなく分かってもらう力をつくることによって、器の大きな人間になれる。**

**さらには包容力がある人間になるには、どうするか。包容力とは、自分と違った考え方の人間を自分の懐の中に包容していることで、違った考え方を持った人から何かを学んで自分を成長させていくことによって、相手が自分のことをちゃんと分かってくれて自分から学んでくれて、そしてあいつは成長していったという流れの中から、「この人についていこう」という思いが湧いてくる。これが包容力がある人間の姿。包容力というのは、多くの人が自分の懐に飛び込んでくる状態で包容力の大きさができていくわけです。相手が自分の懐に飛び込んできてくれる、この人についていきたいと思ってくれることが包容力。**

**相手が自分のところに飛び込んできてくれるには、人から学んで自分が成長していく姿を見せることによって、「この人についていこう」という思いが相手に湧いてくる。**

**最後の大きさは、統率力です。人を引っ張る力、リーダーシップです。地位が無いと統率できませんから、社会的地位を追求することは非常に大事な努力の仕方です。地位が人をつくる原理があります。地位が与えられると、その地位にふさわしい人間に成長できる。国会議員の中にも総理大臣になる前はそう大した人じゃなかったのに、その地位に就くとだんだん総理大臣らしくなってくるという、そういう成長があるわけですね。これは地位が人をつくるという原理であります。統率力を実力として形作っていくためには、まず地位を追求する。社会的地位を求めていく。**

**だけど、地位があってもなかなか人がついてこないと悩んでいる人もいるわけですね。地位に何が付け加わると本当の統率力が成長していくのかと考えると、外的人間力です。社会を生きていくために人類が社会の中でつくってきた人間力というのはいろいろあるわけですね。それは、政治力・経済力・教育力・文化力・軍事力、この五つが外的人間力と言って社会を生きるために人間が持たなければならない能力・力として、歴史的につくってきたものであります。この力を獲得することによって統率力・リーダーシップは成長していくことになります。統率力を成長させていく、人を引っ張っていこうと思ったら政治力を磨かなければならない。また経済力を磨いて金も必要だ。また教育力、部下を育てることも必要。文化力、文化的な教養を身につける必要がある。そして、軍事力。個人的なレベルで言うと、悪への備え→危機対応能力。それにより部下を守ること。それらをしていくと統率力が成長する。**

**本物の人間を目指すには、まずは人間の格をつくっていく努力を仕事の中でしていかなければならない。仕事を通して謙虚さと成長意欲と愛を身につけていく。さらには、謙虚さと成長意欲と愛を原理にして出てきた人格を磨いていくには、人格の高さ・深さ・大きさを求めていく。それによって我々は本物の人物、人間として本物と言うことができる人物に成長していきます。仕事の中で、仕事を通してこのことを実践するのが、大事な努力の仕方なんですね。弱肉強食・利害打算の娑婆世界の中で仕事をすることによって、この力が自分のものになっていくことができるわけですね。そういう意味で職業は、本当に人間が成長するために必要な最大の道場と言えます。**

**次は第八番目ですね、「プロとは、客にさすがと言わせてプロである」。プロというのはお金をもらって仕事をすること。客に出し渋りをさせてはプロじゃない。快くお金を払ってくれるそういう状態になって初めてプロの仕事をしたとも言えるわけですね。客にさすがと言わせる力を身につけることを目標にしていかなければなりません。出し惜しみをさせたり、まけろと言われるようじゃプロじゃない。「これだけのことしてくれたんだから、これぐらい当然だろう」と。客にさすがと言わせることができる何かを持ってなければならない。それは、能力かサービスかあるいは人間性か心遣いか。とにかく「さすがやな」と思わせないと。その金に余りある何かを客にあげないと、客は快く金を出してくれない。とにかくプロの仕事は、客にさすがと言わせて初めてプロだということを常に忘れないで、それを目指して努力する・頑張るということが、仕事をする以上は大事な目標であります。**

**次は、第九番目です。「心を大切にする仕事の仕方」。今の時代は、人間の本質は理性じゃない、人間は心だと言われる時代ですから、心を大切にする仕事の仕方を我々は身につけなければならない。今ほとんどの人が、理屈じゃない心が欲しいと叫んでいる。もう理屈はたくさん！ 自分が本当に求めているものは心だ、というのが今の社会の中で生きている人間の実感であります。皆が皆心が欲しいと叫んでいるのだから、心をあげなければならない。そうしなければ、心の結びつき・心の通い合い・心の絆はつくれませんよね。本当に心の絆、心の通い合い、心の結びつきをつくろうと思ったら、恋愛においても人間関係においても相手の心が欲しいという叫びに応じて、自分自身がその人の求めに応じて心をあげることが心が通い合うということの原理であります。**

**では、心が欲しいとは何が欲しいのか。心をあげるとは何をあげることなのか。そのことはちゃんと分からないと心の結びつきのつくり方がわからない。会社はほとんど仕事の結びつきと役職の結びつきだけで動いているのがこれまでの一般的な資本主義経済における会社の実態でした。それが理性によってつくられた会社のシステムなんですよね。だけど今は人間の本質は心だと言われる時代ですから、会社というものも会社の最も根底には全社員の心の結びつきがあって、それが会社の団結力の基礎になっているということが大事な課題であります。**

**どうすれば一体我々は全社員の心のつながりをつくって、理屈によって壊されることのない心の結びつきによる団結力をつくれるか。これは非常に大きなこれからの企業の課題であります。そのためには、心の叫びに応じて心をあげるということを皆で考えながら仕事をしなければならない。心が欲しいとは、一体何が欲しいのか。これは感性論哲学の立場から考えると、心が欲しいということは、まず認めてもらいたい・分かってもらいたい・褒めてもらいたい・好きになってもらいたい・信じてもらいたい・許してもらいたい・できるまで待ってもらいたい…そういう欲求は、心が欲しいという叫びの中に存在する内容なんですね。**

**感性論哲学では、人生というものの基本を意志と愛であると考えておりまして、人間の本質である心というものは、実質的には意志と愛によって成り立っていると考えています。それによる内容として考えなきゃならんことは、意志を原理にして出てくる具体的な心の欲求は、認めてもらいたい・分かってもらいたい・褒めてもらいたい。愛を原理にするのは、好きになってもらいたい・信じてもらいたい・許してもらいたい・できるまで待ってもらいたいこと。それらが心の中に含まれてるわけですね。つまり、心をあげるということは、まず認めてあげる努力をすること、わかってあげる努力をすること、褒めてあげる努力をすること、そして好きになってあげる努力をすること、信じてあげる努力をすること、待ってあげる努力をすること、これが心をあげるということなんです。なぜ、努力というのか、愛の実証というのは努力なんですね。努力する気持ちがある=愛があるということなんです。相手のために努力する気持ちがなくなったら、愛が失せたということ。相手が自分のことをどの程度好きなのかを知ろうと思ったら、相手が自分のためにどの程度の自己犠牲的努力を払ってくれるかを見ればわかります。またその逆も然り。故に、まず認めてあげる努力をすること、わかってあげる努力をすること、褒めてあげる努力をすること、そして好きになってあげる努力をすること、信じてあげる努力をすること、待ってあげる努力をすること、これが心をあげるということなんです。**

**このことによって、人間には理屈を超えた心の結びつきができるわけですね。心の絆ができる。これが、これからの時代の最も強力な団結力いうことになるわけであります。これからの企業は、会社の最も根底に心の結びつきをつくって、その上に仕事の結びつき、さらに役職の結びつきを乗せて、三次元構造の会社の組織を運営していかなければなりません。そうしないと人間的な組織、人間に興味のある組織がつくれないですね。組織の土台に心の結びつきをつくる必要があって、心の結びつきをつくるための方法として、心が欲しいという叫びに応じて心をあげるという活動が、全社員の間で意識的になされれば、会社全体の中に理屈を超えた心の結びつきと団結力ができて、これが強力な仕事のエネルギーとなって、会社の活力をつくることになるわけですね。**

**次は最後の十番目、「人間は誰でも長所半分、短所半分」。会社も人間の集まりですから、人間の集まりの中で生きていくために一番大事な人間理解の根本原理は、どんな人間でも長所が半分、短所が半分。短所がなかったら人間ではない。短所はあっていいんだ。短所はなくす必要はない。短所が目立つ人はまだ長所が伸びてないからだ。短所をなくす努力をする時間があったら、長所をとことん伸ばすことに全力を注がなければならない。長所が伸びてくれば必ず短所はあまり気にならなくなってきて、長所が伸びてきて、長所が他人から一目置かれるような存在になれば、短所は人間の味に変わり、人間味になってくる。こういう状態を角熟と言います。普通は円熟と言い、真ん丸となって角ばっているところが無い円熟ですけど、だけども人間には個性があって、人間は失敗をしたり不得手なところもあったりと、その個性的にがある。そういう個性的にいろいろがある人間が成長して完成されていく姿を角熟と言います。円熟に対して角熟。角ばったまんま、そのまんま東で熟していく…さんまのままで熟していくというのが、個性の時代の人間の成長の目標だ。**

**そのためには、短所がなくなったら人間じゃないんだから、短所をほったらかしにして長所を伸ばす。長所がとことん伸びてくれば、必ず短所は人間味という人間の味に変わる。「あんな凄い奴なのにこんなところもあって面白いね。なんか人間味を感じるよね」と言われる。これが、長所も短所も生かして生きるという力になってくるわけですね。短所が目立つ人は、まだ長所が伸びてない。だから、長所を伸ばしてあげる。そうすると短所はそのままでも味に変わる。そして短所はあまり言われなくなってくる。どんな人間でも必ず他人から嫌だなと思えるところが半分はある。だから世間から尊敬されてるような立派な方でも奥さんに聞いたら、「あんな人になってしまった」「どこがそんなにいいの？」と。どんな人でも一緒に長くいたら、必ず自分から見て嫌だなと思うところが半分は出てくる。これは避けがたい人間の宿命なんです。人間と付き合う時には、どんな人と付き合うときでも最終的には相手の中に自分にとって嫌だなと思うところが必ずある。しょうがないんだ。そういう人間観を持っていないと、人間と長く付き合うことできません。**

**ましてや結婚生活を考えたら、どんな人と結婚しても最終的には自分は嫌だなと思うところが相手の中に必ず出てくる。しょうがないんだ。そのことがちゃんと分かってないと、結婚生活を長く続けることはできません。だけど、いいところも半分ある。短所を見ないで、長所と付き合うという付き合い方をしないと人間と長く付き合うことはできません。とにかく大事なことは短所はなくならないんだ。そうでないと人間じゃないんだ。そこをちゃんと分かってないと、人を責めるような醜い人間になってしまう。短所はなくならないんだ。昔から愛するとは許すことと言うんですけど、許すとは何かと言ったら短所を許すことなんですよ。短所を許すことができて初めて人間を愛することができる。愛するとは、その人の長所も短所も丸抱えということ。短所は愛せないという人は、人間を人間として愛す資格がないんだ。その人を愛するということは、その人の長所も短所も丸抱えということ。しかも短所は半分もある。その短所が愛せて、初めて愛は芸術となるんだ。短所を愛するための努力が愛を芸術へと高める。とにかく短所がないと人間ではないということ。短所がなくなることを期待してはならない。短所が出てこないように注意をする必要があるし、短所が出てきたら謝る…そういうことを習慣づけないといけない。**

**人の短所を発見したら責めるのではなく、助けてあげたい、役に立ってあげようと思うのが、血の通った温かな心があることの証明なので、人の短所を責める人間には血の通った温かな心は微塵もない。短所をさらけ出して、助けてもらって、助けてくれた人に「ありがとう」と感謝をする。自分の短所をさらけ出して人に助けてもらう勇気を持つこと、これも短所の大事な生かし方なんですね。**

**組織というのは地位が上がれば上がるほど、部下が増えて部下に仕事をさせていかなければならない。上司が自分で全部やってしまうのではなく、できるだけ部下にやらせる。そのためには自分の短所・欠点をさらけ出して、部下に仕事を与えて、その仕事を褒め称える。そうすると、ますます部下は上司のために働いてくれる。助けてあげることも立派なんだけど、人に助けてもらうことも立派なんだ。人を助けてあげることと人に助けてもらうことは同等の価値がある、素晴らしい人間的行為だ。そういう新しい仕事の仕方をこれから我々は身につけていかなければならない。これが心の時代の仕事の仕方の非常に大事な原理であります。**

**とにかく、人間は誰でも短所が半分ある。どんな人でも長く付き合ったら自分にとって嫌だなと思うところが半分は出てくる。これも宿命なんだ。それを認めなければ、人間と長く付き合えない。人を愛するとは、その人の長所短所も丸抱えなんだ。短所は愛せないという人は、人間を人間として愛す資格がないんだ。是非、人間関係を乗り越えていく原理としてこのことも覚えておいてもらいたいと思います。**

**ということで今日は、これから社会に出て仕事をする方々において頭に置いておいてもらいたいことを話しました。また、先輩においても初心に返るという意味で職業とは何なのかをもう一度考えてみてもらいたいと思います。どうもありがとうございました。**